フィールド（現場）からの風 590

宮田守男

今日29日の誕生日花は「カタクリ」、花言葉は「初恋」。初恋の記憶は、人さまざまだが人を愛する気持ちだけは失いたくない感情でもある。

「自分年度」を持って夢を抱き続けよう

29日は昭和14年に結核で24年の生涯を終えた詩人・立原道造の命日でもある。「草に寝て・六月の或る日曜日」の詩の一節に「しあわせは・どこにある？・山のあちらの・あの青い空に・そして・その下の・ちひさな・見知らない村に・私たちの・心は・あたたかだった・山は・優しく・陽に照らされていた・希望と夢と・小鳥と花と・私たちの友達だった」。私たちが毎日観ている情景に声を出してこの詩を読めば、故郷はもっと素敵なものになるに違いない。

いよいよ31日は年度末。巣立つ若者への言葉は限りないが、男はつらいよ・寅次郎の映画で17歳の甥っ子から、人は何のために生きるか問われた寅さんが「何て言うのかな、あ～生まれて来て良かったなって思うことが何べんかあるだろう、そのために人間生きてんじゃねえのか」とつぶやくセリフが今も心に残っている。

年度など関係ないと思う年齢になった人には、一年の一区切りの時期も希薄になりがちだが、今は満年齢を迎えて今後の日々を考えることも多いはず、皆それぞれ「自分年度」を持って、一年の夢を抱くことも必要ではないだろうか。

地域組織の新年度計画の策定時期だ。地震防災などの心得としてよく聞く「自助・共助・公助」。自分の命は自分で守る。隣近所や地域で助け合う、そして国や自治体の対処という三位一体の取り組みの考えだが、一説には名君と呼ばれた江戸末期の米沢藩主・上杉鷹山（ようざん）が掲げた政策に由来するという。藩財政も民の生活も困窮する中で家督を継いだ鷹山は、富民には民の自助と近隣社会の互助、藩が手を貸す扶助の「三助」が必要だとの考えがもとのようだ。

だが高齢化社会では、いざという時には遠くの親戚や不特定多数の「みんな」より、隣近所の人が頼りになっていると「近所（きんじょ）」を加えるべきだと、防災システム研究所の山村武彦所長が実例を踏まえて提唱している。ほかにも「互近所」「防災隣組」などの提唱は、集落組織の新規加入に悩む地域が増える中、行政の防災に対する基本理念を全住民に伝えながらもっと積極的な行政の取り組みに期待する声は多いはずだ。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

3月中旬のＪＲ白馬駅前のタクシー台数の少なさに「ライドシェア」の必要性を実感する